

要 旨

日常に潜む差別について

——アート作品の制作を通して——

張 イ

近年では、Black Lives Matter 運動やアジア人暴力反対運動の展開に伴い、人種を理由とするヘイトクライムやヘイトスピーチがますます注目されてきた。しかし、「差別」というのはこのような形態だけではない。現代では、差別的態度や言動などは適切でないと法律などで規範しているものの、露骨でなく隠された形で行われる偏見や差別はなお広く存在している。これまでの私の差別的体験と他者への調査においても、相手が明らかな悪意を持っておらず、無害に見える微細な差別的言動が多数あり、このような差別を受ける側が間違いなく精神的、肉体的被害を被っている。

そこで、このような日常に潜む差別をテーマとするアート作品の制作を目的として文献と作品研究を行なった。法学、民俗学、社会心理学、社会学それぞれの視点から研究されてきた差別の定義や構造、原因を考察した。中でも、社会心理学で近年注目されてきたマイクロアグレッションという概念について、本論文の研究テーマと合致しているためそれに関する研究を検討した。また、アート特有の曖昧性を発揮すれば、より差別の不可視性と無意識さを表現することができるだろうと考え、現代アート作品の分析を以てアート領域における差別問題の表現方法も確認した。さらに、具体的な制作手法を研究するために、アーティストのソフィ・カルを作家研究の対象とし、写真とテキストを併置して他者との関係構築を表現するという独自の手法を考察した。

以上を踏まえ、自身の作品を構想した。差別を体験して収集したエピソードと当時の心情に基づいて作ったテキストを写真やオブジェに書く、という方法で日常に潜む無意識の差別を顕在化させることに挑戦した。